

在日留学生に必要なソーシャル・スキル

田中共子*・高井次郎**・神山貴弥***・藤原武弘***

*広島大学留学生センター・**名古屋市立大学教養部・

***広島大学総合科学部人間行動研究講座

Necessary Social Skills for International Students in Japan

Tomoko TANAKA, Jiro TAKAI, Takaya KOHYAMA and Takehiro FUJIHARA

* Institute for International Education, Hiroshima University

** College of General Education, Nagoya City University and

*** Department of Behavioral Sciences, Faculty of Integrated Arts
and Sciences, Hiroshima University

Abstract : As a part of researches on social skills training aimed at facilitating the cross-cultural adjustment of sojourners in Japan, this study asked Japanese experts in interpersonal behavior research about how international students should cope with ten aspects of social difficulty in interpersonal situations. The mailed questionnaire administered to 133 social psychologists. Twenty three subjects responded to the open-ended items. Their responses were categorized through the KJ method of content analysis. The following main categories were obtained ; A) interpersonal relations (relationship with stranger, friendship formation, behavior toward a superior, overcoming language handicap, managing social exchange, behavior toward opposite sex members), B) social situations (public etiquette, dealing with collective behavior), C) indirectness (negating, indirect expression). Coping strategies suggested by the respondents were categorized into three areas of a) behavior, b) cognition, c) passiveness, and under these categories were identified their respective component structure. The results offer fundamental resources for formulating structured learning, cognitive restructuring and goal setting regarding social skills training.

Keywords : Japanese social skills training, culture specific, social difficulty, interpersonal behavior, coping strategies

目 的

異文化適応のソーシャル・スキル・モデルは、Furnham & Bochner (1986) によれば以下のようなものである。文化圏ごとに独自の価値観とそれに基づく行動様式が存在しているため、対人行動

の成立、維持、発展の技術 (social skill) もまた、認知的、行動的なレベルにおいて異なる。当該文化圏においては、それらを会得できていれば速やかに対人関係網を発達させることができ、獲得したソーシャル・サポートからストレス緩衝効果が得られ、さらに対人関係上の誤解やトラブルが減少することもあって、精神的健康が向上すると考えられる。また社会的場面においても有能性 (social competence) を発揮できる。異文化環境への新たな渡来者は、この行動様式を学習する機会がなかったがゆえに、対人関係上の困難を生じ、不適応に陥りやすくなっている。しかし適切な学習さえ行なわれれば、適応的な行動は獲得できる。その方法は、時間をかけて体験的に試行錯誤するしかないのではなく、すみやかに行動レパートリーを広げるための学習を行うといった心理学的介入の可能性も考えられる。

ここでは異文化適応に果たすソーシャル・スキルの役割を、ソーシャル・スキルが不足すると社会的に適応しにくくなるといった、適応のスキル欠損仮説の分脈から論じている。対人関係上のスキルには文化一般 (culture general) 的な要素のみでなく、文化特定 (culture specific) 的な要素もあるので、異文化圏に移行した者が後者を十分獲得していないうちは、社会的なコンピテンスが発揮できずに困難を感じる場合があることを指摘している。このように考えれば、文化特異的な要素を取り入れたスキル学習をすることで、適応が促進できるのでないかと期待される。こうした介入を具体化していくためには、実際の異文化適応上の困難に対する方略を、文化特異的な要素を十分考慮したうえで明らかにしていく手続きをとるのが現実的であろう。つまり生じがちな問題に対し、問題解決に焦点化し、その文化圏で実際に効果があるというスキルを選定する。その際文化一般/特異性の高低に留意し、文化特異性が濃い側面には十分注意を払う。社会的困難には何があるのかを明確にし、そして対処方略を明らかにして、構造的なスキル学習を行うのである。

ソーシャル・スキル・トレーニングを意識して、留学生の社会的困難を取りあげた研究は英国や日本においてみられる。Furnham & Bochner (1982) は、英国内の留学生に、40の社会的場面の困難度を評定させ、特に社会的困難の高い場面を明らかにした。困難の大きい10項目を順にあげると以下のものであった。「同世代の英国人の友人を作る」、「攻撃的に迫ってくる人に対応する」、「友人関係の開始のために人に近づく」、「集団に向かって話したりして自分をアピールする」、「人と深く知り合う」、「冗談やユーモアを理解する」、「注目の的になりながら人と対応する」、「会話の主導権を握る」、「よく知らない人と一緒に過ごす」、「不満足なサービスに対し人前で文句をいう」。彼らは、これをもとにソーシャル・スキル・トレーニングを行うとよいと提案している。彼らの質問紙項目を日本で留学生に適用した佐野 (1990) の報告では、困難な場面を大きく4つにまとめて評定値を比較し、「正式場面」、「自己主張」、「友人関係」、「日常生活」の順に困難度が高いと述べている。しかし、これらの研究はいずれも英国での困難をもとにしたものであり、日本社会における対人行動上の困難を明らかにするには不十分なものと思われる。すなわち日本にいる留学生を対象に、その困難について特に文化特異的な側面に留意しながら、より明確にする必要がある。さらに困難が特定されたとしても、その対策はいかなるものであるのかが明らかにされなければ、実際のトレーニングを行うことはできない。

著者らは、こうした課題に答えていくために、まず在日外国人の対人行動上の困難にはどのようなものがあるかを明らかにしようとした。半構造的面接調査と自由記述を組み合わせた調査によって、まず困難のカテゴリーが整理され、出身地域など調査対象者の属性によって、感じられる困難に特徴があるかどうかを検討した (田中・藤原、1992)。そして面接結果から事例を整理し、困難の感じられる社会的分脈を明らかにした (田中、1991)。見いだされたカテゴリーは、1.表現の間接性を理解し使いこなす、2.礼儀や社会通念としての行動を会得する、3.抑制の効いた自己表現を

する、4.異性と関わる、5.日本人による外国人の特別扱いに対処する、集団主義的な行動と折り合うことであった。

ついで、困難に対する対処にはどんなものがあるかを調べるための調査を行った。調査対象者は3通り選んだ。まず、日本ですでに良好な適応を果たしている留学生に、これらの場面で自分はどうか対処しているのかを尋ねた。留学生の実施している方略は、彼らにとって用い易く、また無理のないものが含まれていると思われたので、彼らからの知見は有用であろうと考え、調査対象に選んだ。事例とともに対処方略の項目が整理された(田中、1992a)。

次に、日本人学生に、自分はその種の場面でどうするか、また留学生にはどうして欲しいと思うかを尋ねた(田中・高井、1991)。日本人学生は、留学生の行動のモデルになり易く、また身近な対人関係を築く相手でもあるため、彼らからの示唆には少なからぬ意味があると思われたため、調査の対象とした。その結果、自分から外国人に近づくことには不安や抵抗があるが、相手からは積極的に近づいてきて欲しいと思っていることなどが明らかになった。

第1調査で留学生の立場から、第2の調査で日本人学生の立場から明らかにされた対処方略への知見に、さらに専門家からの情報を加味するため第3の調査を行った。本報告はこの第3の調査報告にあたる。今回は、日本における対人行動の研究者である社会心理学者にアドバイスを求めた。日本で、対人関係形成のための行動に熟知している専門家の意見には、留学生や日本人学生では認識できなかった角度の示唆や、より大局的ないし詳細なレベルの情報が含まれるであろうと考えたためである。また、留学生を指導する立場の日本人の大学教官が多く含まれている集団という点にも少なからぬ意味がある。留学生の指導教官になる可能性があり、指導教官は留学生のソーシャル・ネットワークにおいてしばしばアンカー・パーソンの役割を果たす重要な人物である(ヒックス・有馬、1992)。留学生の社会的困難を援助する側として、そして大切な人間関係を築く相手として、その意見は重要なものである。

すなわち留学生が日本で感じた対人行動上の困難に対し、どのような対処をしたらよいかについて、日本人の対人行動を熟知し客観的判断ができると思われる専門家対象の調査結果を報告する。

本研究は、松下国際財団1991年度研究助成(代表・藤原武弘)を受けて行われた。

方 法

調査対象者：主として大学教官である社会心理学者によって構成される、対人行動研究会の会員133人。日本人の対人行動の特色に関する認識が高いと考え、郵送法で調査を依頼した。回答者数は23人(回収率17.3%)。留学生指導の経験のある人11人、ない人11人、不明1人。海外渡航経験は、ある人16人、ない人6人、不明1人であった。

質問紙：対人行動上のアドバイスを得るための場面を設定するにあたっては、田中(1991)、田中・藤原(1992)の調査結果を参考にした。留学生が出会いやすい典型的な困難をとりあげ、10通りの場面を設定した。始めに「あなたが指導している留学生がいます。彼らが次のようであった場合、どのようなアドバイスをするかをお尋ねします」として、以下の場面について答えてもらった。回答は、答えられる項目について自由記述をしてもらった。その際アドバイスされた者が実行し易いように、できるだけ具体的で段階的なステップに分けて記述してもらうようにした。

①初対面：その留学生は、日本では、初対面の人とどう接していいかわからないので、始めて人に会う場面が苦手だと言います。どうふるまい、どのように挨拶し、自己紹介し、会話を始め、互いを知っていくのか、特に注意すべきことは何なのかをアドバイスして下さい。

②友達作り：その留学生は、日本でなかなか友達できません。実際にどうすれば、日本人の友達を作れるでしょうか。何をきっかけに、どのような事をし、どのような段階を踏んだらいいのか、何に気がつけたら友人関係がうまくいくのかなどを、アドバイスして下さい。

③目上：日本では、学校の先生を始めとして目上の人に対する振る舞いに注意しなければなりません。あなたの留学生はその要領がまだわからないために、目上への苦手意識を持っています。実際どんな言葉や身ぶりを用いるか、注意すべき事などをアドバイスして下さい。

④言葉のハンディ：あなたの指導する留学生は、まだ日本語があまりうまくありませんが、言葉の不自由さを持ちながらもなんとか意志の伝達をしたいと言います。言葉の不足を補う要領や、言葉の十分でない場合のつきあいかたの工夫や注意を、アドバイスして下さい。

⑤社交：日本のおつきあいといえば、ご進物やお祝い事、コンパや二次会、おごりや割り勘、社交辞令などいろいろあります。あなたのところの学生は、こうした日本のおつきあいが理解できず、これらを苦手としています。必要な知識と技術、心得について、アドバイスして下さい。

⑥公共マナー：その留学生は、日本に来たばかりで、公共の場面で人と接するときの日本のマナーがよく分かりません。不評をかわないためには、そういったマナーにどんなものがあるか、あらかじめ教えて欲しいという学生に、アドバイスして下さい。

⑦異性：男性と女性、異性間の関係の取り方やつきあい方、対応に関する習慣には、日本には日本のやり方があります。日本では異性に対して、社会的場面でどのように接するのか、また個人的にはどう関係を発展させていくのか、理解したいという学生にアドバイスして下さい。

⑧集団：その留学生は、日本のように集団で動くことを基準とせず、自分の意見と判断で動くことを習慣にする国で育ったため、日本では違和感があると言います。その学生は、日本ではどのようにしたらまわりとうまくやっていけるでしょうか。アドバイスして下さい。

⑨否定：あなたの指導する留学生は、日本人は直接「ノー」という表現を使わずに、反対したり断ったりすると言って混乱しています。額面通りでない否定的表現の読みとり方や、そういったサインの出し方をアドバイスして下さい。

⑩間接性：遠慮、謙遜、慎み深さ、細やかさ、以心伝心、沈黙は金、建て前などは、実際何を要求されているのかわかりにくいと言います。直接的な言語表現以外のニュアンスを含んだ、こうした日本的と思えるコミュニケーションの意味や、その実践の要領をアドバイスして下さい。

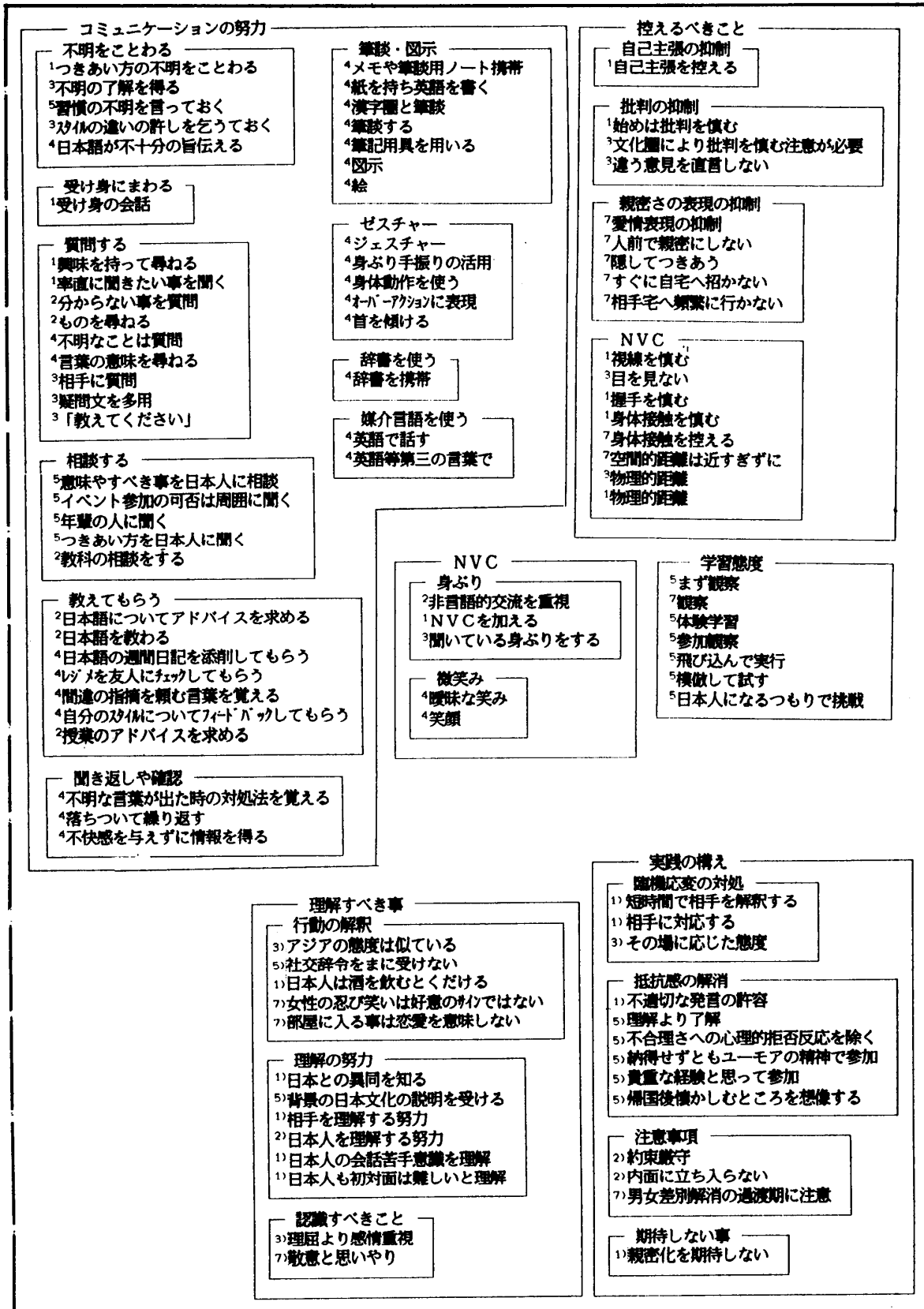
回答の整理：アドバイスされた内容は472項目（一人平均20.5個）にのぼったが、それらをKJ法を用いて分類した。まず書かれた内容を一つずつ分けて箇条書きにし、カード化した。その際、10項目のどの設問の回答かが分かるように、1・2…10の項目番号を文頭につけた。そして認知行動変容のプログラムに用いやすいように、対処の内容を「a.行動」または「b.認知」について述べたものに分類した。中には積極的に対処しなくてもよいといった叙述もみられたが、それは「c.非積極性」とした。これらはカードの隅に色をつけて区別した。

10の設問の中には、アドバイス内容が他の設問と似ているものもあった。例えば、「初対面」でも「友人作り」でも、「相手と共通の関心事を探す」、「多く話す」などがあげられていた。そこで回答された内容が似通っている設問を合わせて、A・対人関係（初対面、友人作り、目上、言葉のハンディ、社交、異性）、B・社会的行動（公共マナー、集団）、C・間接的表現（否定、間接性）の3つのグループにまとめて扱うことにした。以下、これら3グループごとに回答を一緒にして分析した。

KJ法による分類手続としては、初めに個々の項目を一覧しながら、似通った内容のものを適宜あわせて組にする。さらに似た組同士を見つけて組み合わせ、より大きなまとまりを作っていく。こうして次第に大きなカテゴリーへとまとめていき、最後に適宜カテゴリーの命名をする。分類と



図1-a 対人関係：行動・認知面の方略。文頭の数字は設問番号。) のある項目は認知、ない項目は行動についての記述。



(図1-a 続き)

その命名は、著者らが協議のうえ行った。

結 果

1. 対 人 関 係

対人関係についての対処の仕方に関するアドバイスは、以下のようにまとめられる。行動面であげられた方略は、以下のカテゴリーにそって整理された(図1-a)。<出合いの機会作り>：コンパや飲食の機会、サークルや共同作業、イベントなどへの参加をはかる。<積極性>：すすんで接触を開始し、会話の量や接触頻度をふやす。<関係の開始>：挨拶、自己紹介、話題の設定、自己開示、つきあいを深めるなどの段階をふむ。<つきあう人の選択>：外国に興味のある人、身近な関係のある人、親切な人など適切な人を選び、あるいは紹介してもらい、適切な人にアプローチする。<社会的品格>：答礼、敬意、丁寧さ、マナー、相手への配慮、他との調和に注意する。<コミュニケーションの努力>：言葉の不明を断る、質問する、相談する、教わる、書く、描く、辞書を使う、媒介言語を使う、聞き返しの要領を身につけるなど。<学習態度>：参加学習のすすめなど。<ノンバーバルコミュニケーション(NVC)>：身体的距離、身ぶりや表情を適切なものにする。<控えるべき事>：自己主張や批判を抑制することなど。

認知的な側面は、以下のようにまとめられた(図1-a)。<理解すべきこと>：行動の意味や背景。<実践の構え>臨機応変の対処や抵抗感の解消など。

非積極性については、日本に合わせなくてよい、どの国も同じ、意識しない、失敗を恐れずに、できなくても仕方ない、外国人だから許されるなどの内容がみられた(図1-b)。

2. 社会的場面

行動面では、次のようなことがアドバイスされた(図2-a)。<同調>：周囲に合わせる、周りをよくみる、違った事をしない、賛同する、主張をしない、ボスに従う。<協調の工夫>：断り方や媒介者の使い方、態度の使い分けに習熟し、助言を受け、不明をことわり、手段としての傾聴をする。<礼儀>：敬意、マナー、挨拶に注意する。<表現の抑制>：感情や愛情表現を控えめにし、空間的距離と声の大きさに注意する。

認知面では、<認識すべき事>として、同調の必要と限界をおさえること、<学習のための心得>としては、違いを理解すること、時間をかけること、抵抗を減らすことがあげられた(図2-a)。

非積極性としては、自分をつらぬく、神経質にならない、ある程度はかまわないなどがある(図2-b)。

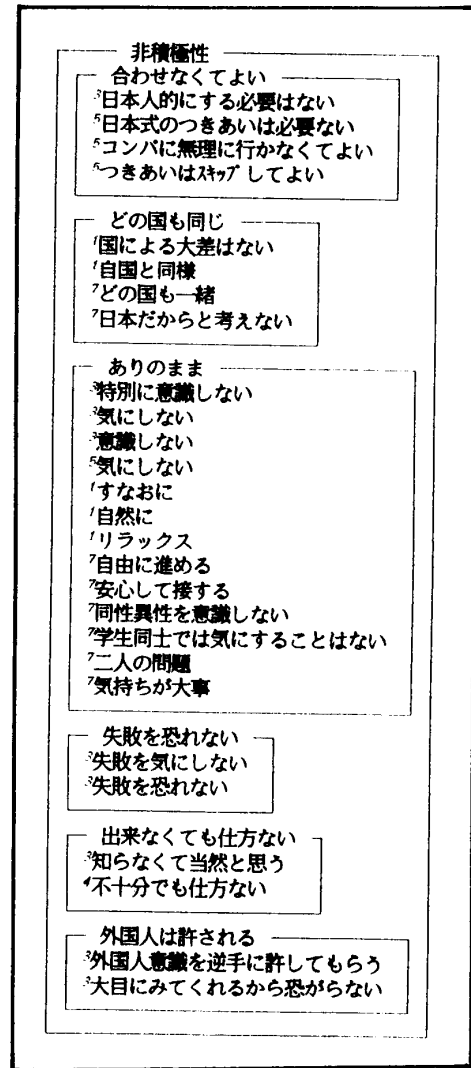


図1-b 対人関係：非積極性のアドバイス。
文頭の数字は設問番号。

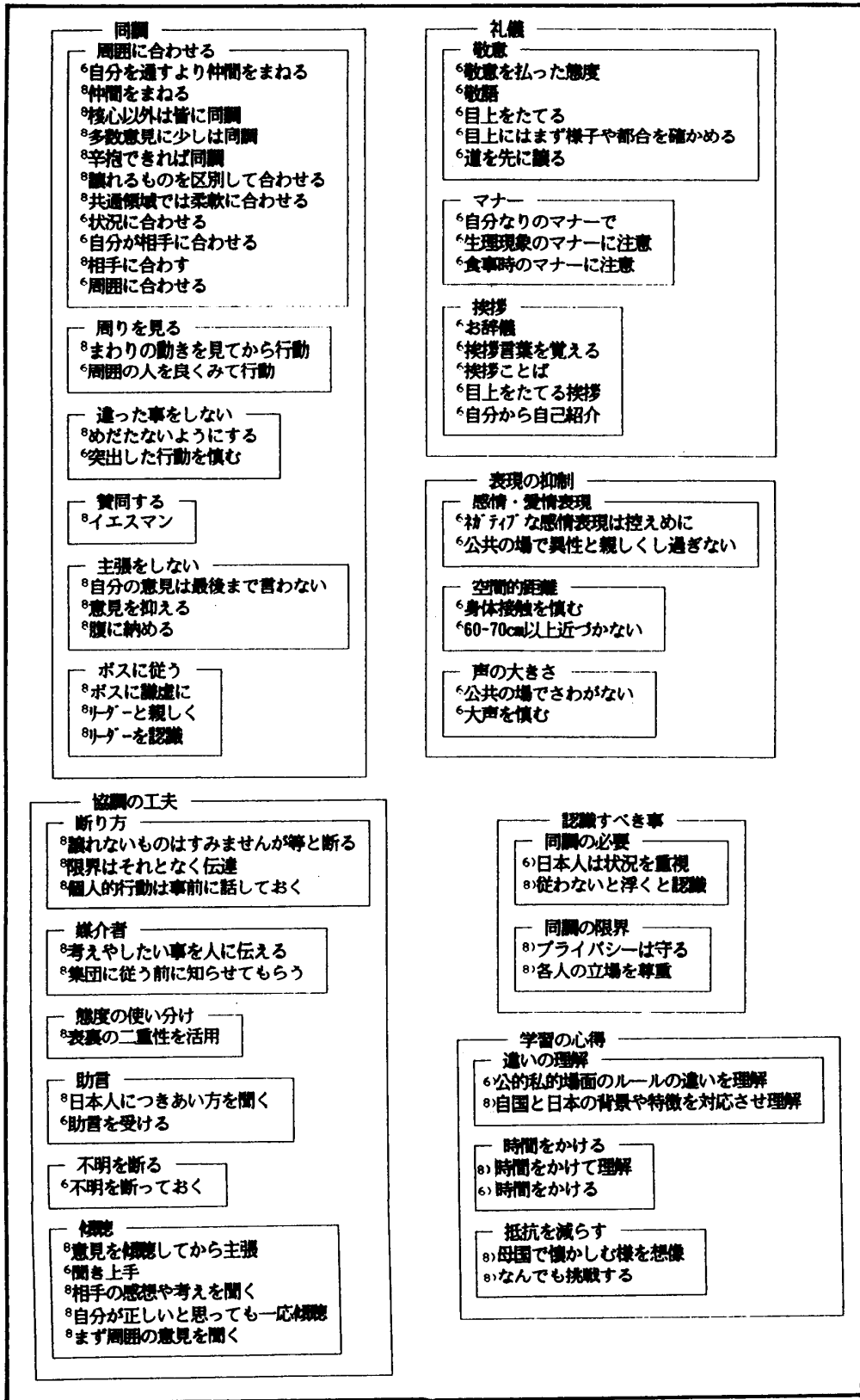


図2-a 社会的場面：行動・認知面の方略。文頭の数字は設問番号。) のある項目は認知、ない項目は行動についての記述。

3. 間接的表現

主に行動面では、以下がアドバイスされた（表3-a）。＜判別の工夫＞：明確な表現を要求する、確認をとる、待つ。＜実践の要領＞：ノーの多様な言い方と謙遜の仕方を知る、実践する。＜実践の姿勢＞：相手への配慮、控えめにすること、待つこと。

認知面では、以下があげられた（表3-a）。＜判断の手がかり＞：曖昧さ、積極性のなさ、無言、言い替えの表現、非言語的表現、状況、分脈による判断。＜解釈＞：建て前や遠慮の意味。＜姿勢＞：受動性の大切さの認識、どちらでもいいと思うこと。

非積極性としては、仕方ない、実践しなくてよい、次第に学習するといったものがあつた(表3-b)。

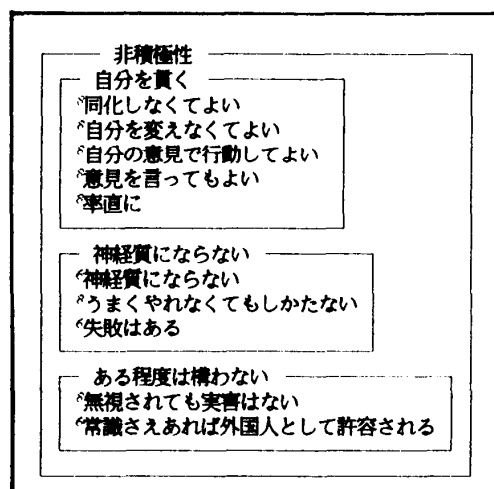


図2-b 社会的場面：非積極性のアドバイス。
文頭の数字は設問番号。

考 察

日本人の対人行動の特色をふまえたうえで、留学生が日本で円滑に対人関係を築けるようにアドバイスされた対処方略が、対人関係、社会的場面、間接的表現に分けて整理された。

まず対人関係を「形成」するためには、以下のことが明らかになった。始めに興味や飲食や共同作業に出会いの機会を求めたり、自分に対しても興味を持ってくれる人や身近な人など、適切な相手を選ぶ必要がある。関係を「開始」するためには、挨拶し、話題を選び、共通の関心を探ったり自分の情報を提供したりすることも必要となる。さらに関係を「維持」するには、よく接触し多く話し、社会的品格にも注意を払い、言葉のハンディを説明し、相談や質問、聞き返しを多用し、紙に描いたり身ぶりで補ったりするとよい。アグレッシブな表現は避け、まずはよく観察してから体験学習するつもりでいることが望ましい。社会的飲酒など留学生の母国にない行動については、日本での特異な行動の意味を誤解なく理解し、背景の価値観についても知識を持ち、余裕を持って柔軟に対処することも必要である。

社会的場面に関する方略については、以下が明らかになった。まわりをよくみて協調の工夫をし、自分の評価を高めるような礼儀や、評価を低めるような歓迎されない行動に留意しながら、時間をかけてうまくやる方法、ないしはおりあつていく方法を見つけるようにするのがよい。こうした周囲との調和の方策が多くあげられる背景としては、集団主義 (collectivism) (Hui & Triandis, 1986) 的な日本の社会を指摘できよう。この種の方略が特に重要になるという点が、日本の社会的場面における対処方略の特徴といえる。

間接的表現については、「発信」する以前の「読解」の手がかりが多くあげられ、認知的な項目が目立つという特徴が見られた。明らかになったことは、手がかりを探して誤解なく反応し、相手や周囲を思いやつて行動することが必要だということである。この背景としては、間接的表現を重視する日本のようなローコンテクスト文化 (Hall, 1979) において、表現されないものを読みこなしあう、いわゆる以心伝心的な伝達を体験的に会得するのは外国人にとって容易ではないということが考えられる。

あげられたアドバイスには、文化特異性の高いものも文化一般性の高いものもある。例えば文化

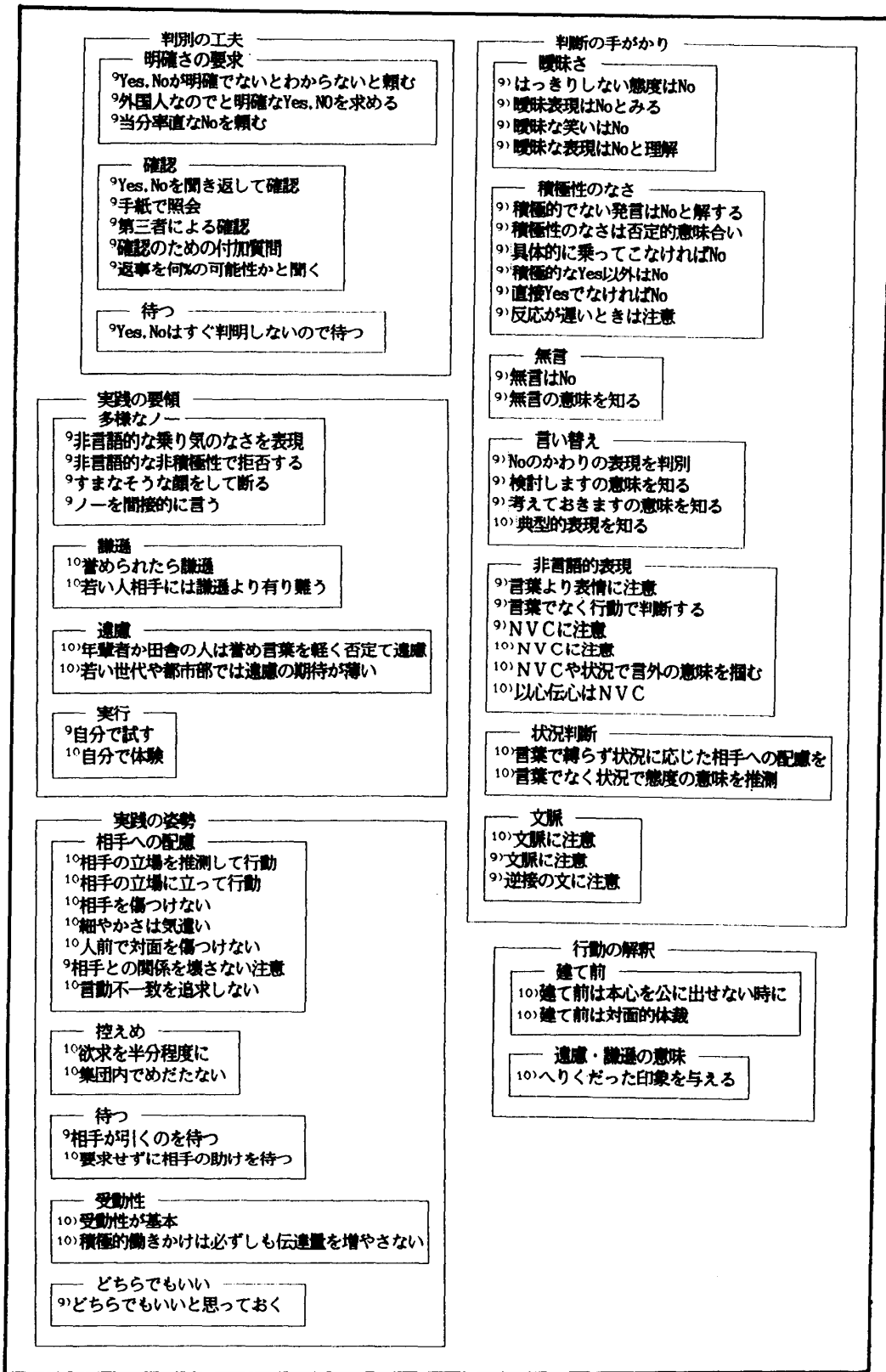


図3-a 間接的表現：行動・認知面の方略。文頭の数字は設問番号。) のある項目は認知、ない項目は行動についての記述。

特異的な要素の濃いものとしては、「コンパ」とか「おじぎ」などがあげられる。また文化一般性の高いものには、「多く接触する」とか「顔を覚える」などがあげられよう。文化特異性をみる例として、英国人である Argyle & Henderson (1985) がまとめた、「友人関係を成功させるルール」との異同をみてみよう。その中の「自己開示」は今回と共通しているので、日英間での一般性が高いとみなせる。逆に「プライバシーや独立性の尊重」などは、今回なかったという意味で、英国独自の文化特異性が高い部分だろう。

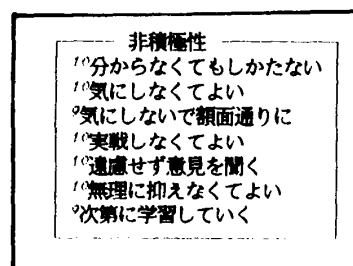


図3-b 間接的表現：非積極性のアドバイス。
文頭の数字は設問番号。

今回上記であげたような行動的側面の方略は、どのようにソーシャル・スキルを指導するかを考える際の基礎的なデータになると考えられる。これらを難易度に留意して構造的に並べて、学習しやすいように組み立てる事によって、スキル学習プログラムを作成できる。いわゆる訓練モジュールと言われる、訓練すべき内容の単位を書き下ろすためのデータである。そして認知的側面でのアドバイスは、望ましい認知を導くための指導、すなわち認知的再体制化のフェーズに活用できる内容である。日本的な行動の理解の仕方や、社会的分脈の判断の仕方、相手のサインの解読の手がかり、さらに文化特異的な行動を実行するときの姿勢のアドバイスまでが含まれている。このように多様であるため、認知面のアプローチを今後より洗練させていく必要があるだろう。

ところで設問では、「どのような行動を実行したらよいか」「何に注意すべきか」「どのような要領でやるのか」などと尋ね、実行すべき行動や認知を述べてもらおうとした。しかし回答には、「気にしなくてよい」「しかたない」などの、「非積極性」と分類される内容もみられた。このことは、「こうした日本的行動は望ましいものではないので実行すべきでない」という評価や、「外国人はこうした行動をしないもの」という先入観、あるいは「外国人はするには及ばない行動である」といった判断が存在することを示唆している。これは日本人の側からみて、外国人にやってほしい行動は何か、その期待がどの程度のものなのかを考える手がかりになる。おそらく日本人の中には、それを比較的 low 設定する者も high 設定する者もいると思われる。実際のプログラム構成および実施に際し、どのレベルまでの学習を行うのかという目標設定は、トレーニーの需要を基準にして検討していくことになるだろう。個々の訓練者に合わせたプログラムという意味では、欠損スキルのアセスメントを基本にしながら、日本語力や出身文化圏などを考慮した指導方法も考えていくのがよからう。

次に、我々の行った先行研究との比較を試みる。まず先輩留学生を対象に対処の仕方を尋ねた結果(田中, 1992a)と比べてみよう。例えば間接性への対処の仕方について、留学生の回答は、行動面では対応の技術として「主張性の低さへの対応」、「主張の仕方」、「NVCの活用」、「建て前を使うこと」を、主張性を控える方法として「直接性の回避」、「主張性を低める」ことをあげている。具体的には、「“ちょっと”とためらって断る」、「好みを聞かれた時にどっちでもいいと答える」などと答えている。認知面では、メッセージの読みとり技術として「NVCの読み方」、「真の意味の理解」、「表現されないものの理解」、適切な認識の仕方として「迂回する表現の知識」、「間接性についての考え方」、「主張の意味」があげられている。細かくは、「返事の遅れに不満足を読みとる」、「“考えてみます”は断りの意味あいが強い」、「相手の気持ちを傷つけないようにはっきり言わないのだ」、「間接性は不正直や拒否ではない」などとしている。

拒否を読みとるサインを、返事の遅れやあいまいな表現に見いだすことを指摘する点を始め、基

本的な内容には今回の指摘と共通性がある。しかし今回は、イエス・ノーの判別の仕方にしてもより細かく多彩で、文化的背景を考慮して丁寧に解説が行われ、日本という自文化への気づきと知識が反映されている。留学生が経験的に自覚し使っているスキルは、彼らにとって無理がなく易しいものであろうが、使えている手がかりは一部分だと思われる。日本人側からのアドバイスを補うと有効であろう。自文化の枠組みの中で無意識にとっている行動を再認識することは易しくはないが、今回は、回答者が専門家であったためにアドバイスもより豊富だったと思われる。ただし回収率が比較的低かったことは、答えるのがなかなか難しい内容であったことを反映しているようにも思われる。さまざまな回答者が思いつく断片を集めて、それを構成していくことで全体像が整理されていくという点では探索的な試みといえるが、こうした定性的な検討は定量的な解析に先んじて必要であろう。

次いで日本人学生の調査結果（田中・高井、1991）と比較してみる。彼らは留学生から積極的に近づいて来て欲しいと願っているが、自分からはなかなか近寄れないと答えている。さらに外国の文化のことを教えてほしいと願いながらも、日本文化を尊重してほしい、自分達を見下さないでほしいとも願っている。すなわち友人作りの技術を使いこなして積極的にアプローチして来てくれて、しかも日本文化に肯定的な姿勢を持つ者であれば、友人になってみたい気持ちを持っている。彼らの意見は、日本人学生側からの留学生の行動への要求水準を表している。留学生と日本人学生との親密化は困難だという指摘も多いが（横田、1991）、日本人側が何を求めているかを知り、どうしたらよいかが具体的に分かるならば、友人関係形成の促進には有用と思われる。「積極的に話しかける」、「日本人を理解する努力をする」などといった、今回勧められた方略は、日本人学生のニーズと重なっているため、実施すれば効果を発揮するだろうと予想される。

最近では異文化適応を、ゲストの不適應症状の発現の過多からとらえるのみではなく、ホストとゲストの相互作用に視点を拡大すべきであるという主張も行われるようになってきた。例えば、Furnham & Bochner (1987) は、異文化接触に関する心理学的研究には、①移民・留学など対象別、②目的や時間別、③接触のあった集団への影響、④接触がゲスト・ホスト両側の個人にもたらす効果、の4つの視点が考えられるが、これまでの研究では①②や④の前半（ゲスト側）に重点が置かれており、今後は③や④の後半（ホスト側）にもっと焦点をあてて、相方向性の視点を持つべきであると述べている。この意味でスキル獲得はエスノセントリズム（ethnocentrism）かとの疑問も寄せられるようであるが（田中、1992b）、ソーシャル・スキル・モデルから考えれば、異文化行動の再学習は、単に行動の選択肢を増やすための方策に過ぎない。むしろ行動様式の対比的な理解を通じてアイデンティティの混乱を避け、行動様式のバイリンガルとして異文化理解を進めていく有効な方法とみなされる。その訓練は、クライアントに適用すれば治療行為として、行動カウンセリング（behavioral counseling）に取り入れられる。渡航前のカルチャーショック対策として、予防医学的に健常者に適用するならば、健康教育ないし異文化間教育として取り入れられる。そのプログラムは、強力な行動修正をもたらす行動変容というよりは、学習機会の提供と考えられる。しかし効果の強さと持続性、消去の必要性などの問題は、外的手がかりや社会的分脈によるスキルの使い分け能力の高さにかかってくると思われ、そのための介入を施した方がよいのかといったさらなる問いかけにも通じる。例えば帰国後のリエントリー・ショック予防のため、帰国前に母国のスキル訓練を施すという方向も考えられよう。異文化適応現象に対する新たな概念としてソーシャル・スキル・モデルを適用していくには、こうした多角的な検討も必要になるとと思われる。

文 献

- Argyle, M. & Henderson, M. (1985) : *The Anatomy of Relationships :and the Rules and Skills Needed to Manage Them Successfully*. Penguin Books. 吉森護 (編訳) 1992 人間関係のルールとスキル. 北大路書房.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1982) : Social difficulty in a foreign culture : An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.), *Culture in Contact*. Pergamon Press.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1987) : *Culture Shock*. Pergamon Press.
- Hall, E. T. (1977) : *Beyond Culture*. Anchor Book. TBS Britanica.
- ヒックス, J. E. ・有馬道久 (1992) : 留学生の異文化適応. 山本多喜司・ワップナー, S. (編) 人生移行の発達心理学. 北大路書房.
- Hui, H. & Triandis, H. (1986) : Individualism-collectivism : A study of cross-cultural researches. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 17(2), 225-248.
- 佐野秀樹 (1990) : 異文化社会への適応困難に関する研究－社会場面に関する分析－行動療法研究, 16 (1), 37-44.
- 田中共子 (1991) : 在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル 異文化間教育, 5, 98-110.
- 田中共子 (1992a) : 日本における対人関係面の適応のための異文化間ソーシャル・スキル－異文化環境で在日留学生が用いた対人関係の形成・維持・発展に関する方略－ 広島大学留学生センター紀要, 3, 53-73.
- 田中共子 (1992b) : 異文化環境におけるコミュニケーション・コンピテンス－異文化適応のソーシャル・スキル・アプローチ 日本コミュニケーション研究者会議プロシーディングス (1992年版), 73-102.
- 田中共子・藤原武弘 (1992) : 在日留学生の対人行動上の困難－異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討－ 社会心理学研究, 7 (2), 92-101.
- 田中共子・高井次郎 (1991) : 日本人学生の社会的行動－留学生のための日本的ソーシャル・スキル指導へ向けての予備調査－ 中四国教育学会発表配布資料.
- 横田雅弘 (1991) : 留学生と日本人学生の親密化に関する研究 異文化間教育, 5, 81-97.